

ハウスモモの平棚仕立て

県果樹試験場 落葉果樹部(現、農研センター果樹研究所落葉果樹部)

研究のねらい

近年、モモのハウス栽培が、本県も含め、全国的に急速に増加しつつある。ハウスモモのメリットとして、早期出荷、品質向上、並びに労力分散などが考えられる。一方、デメリットとして、施設費の問題がある。

そのため、早期に成園化を図り、加えて、品質を向上させる仕立て方及び整枝法についての検討を行い、農家経営の安定を図る必要がある。

この試験では、平棚仕立てと従来から行われてきた開心自然形について比較検討を行った(供試品種:布目早生)。

研究の成果

1. 平棚仕立ては、枝を自由に誘引できるため、冬季のせん定が軽く、結果枝の確保が容易で、樹冠面積も早く拡大することができた。
2. 労力面では、せん定時の誘引時間がやや長かったが、それ以外については、脚立を使う必要がないため、労働時間が短縮できるとともに、作業の安全性も図ることができた。
3. 収量面では、4年生で1樹当たり約41kg、10a当たり換算で3.4tの収量を確保でき、開心自然形の1.3tと比べると、約2.6倍となった。つまり、平棚仕立てについては4年目で完全に成園化が図られた。
4. 果実品質については、特に着色がすぐれ、奇形果も少なくなる傾向にあった。
5. 平棚仕立てにすることにより、徒長枝の発生が開心自然形より多くなる傾向にあるので、芽かぎ、ねん枝並びに着色開始直前、収穫直後及び8月下旬～9月上旬の夏季せん定は必須作業と思われる。
6. また、主枝先端は必ず立てるとともに、主幹近くの枝配置はなるべく返し枝を使うようにする必要がある。
7. 結実が良くなるので、着果過多には特に注意する。大玉生産を行うためには、1㎡当たり20個前後の最終着果量が適当と思われる。

図1 仕立て及び整枝法
平棚仕立て（H型4本主枝）



株間：4 m

開心自然形（2本主枝）



株間：6 ~ 7 m

いずれも永
久樹は谷植え
とする。

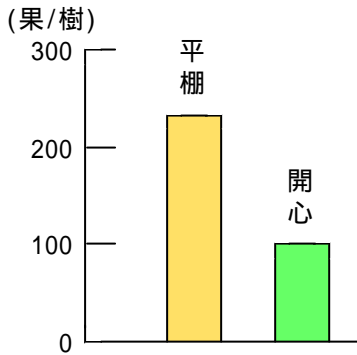


図2 1樹当たり収穫果数（4年生）

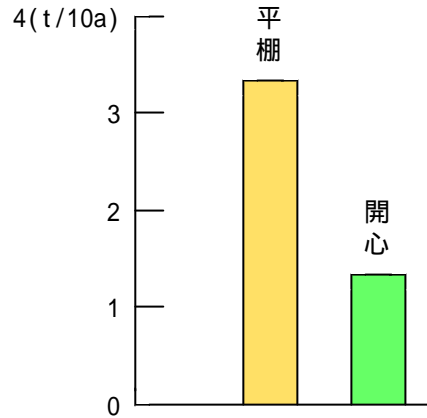


図3 10a当たり換算収量（4年生）

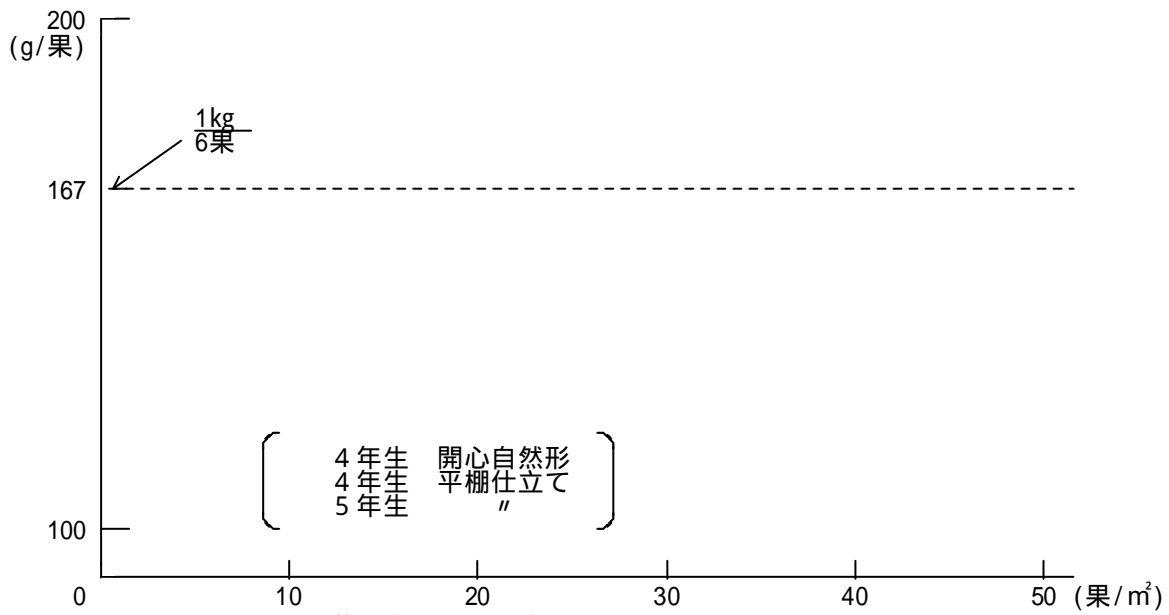


図4 着果数と1果平均重

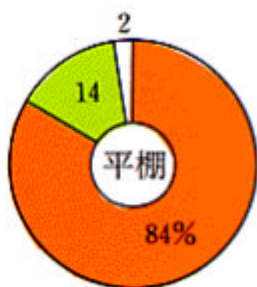


図5 着色の良否（4年生）

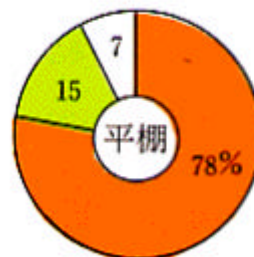
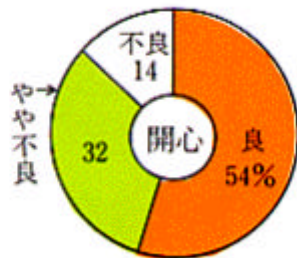


図6 果形の良否（4年生）

